

## 終戦六十五年目を迎えて想うこと

中区支部 府川 みつ枝（妻）

戦没者 府川 茂治

戦没地 横須賀市

六十五年目の終戦の日を迎え、過ぎし日を想い感無量でした。私は学校を卒業した年の早い結婚でした。二ヶ月目に夫に召集令状 外地スマトラ島へ派遣されました。

気候、環境等総て違う南国での軍隊生活 病に侵され内地に送還されました。そして戦病死となりました。

昭和二十年五月二十九日横浜大空襲、これも忘れられない日です。いつもと同じ穏やかな朝を迎えました。午前八時すぎ警戒警報、すぐに空襲警報そして敵機来襲、爆弾投下と一瞬にして焼け野原の横浜と化したのです。敵機が去った後、怪我・火傷を負った人が道端に置いてある防火用水を被りかぶりの移動です。

婚家、実家、親戚と全部焼けました。住む家がありません。実家が山形に疎開、私も幼子を背負い手にはおむつだけの荷物について行きました。行き先は楯岡町の隣村、今では都会と変わらぬ市ですが当時は小さな町でした。

働かなくてはなりません。子持ちの私など雇ってくれる所ありません。やっと就職した会社は倒産、何か家で働ける仕事をとって洋裁学校に行きました。その頃の学校は山形市内にしかありません。片道二時間半往復五時間かけての通学でした。冬になると雪の多い所です。国道でもバスが不通になったり汽車の二、三時間の遅れも普通でした。雪の中、滑ったり、転んだりの通学でした。学校は自由教材で他の人の二倍三倍と勉強しました。先生方も協力して下さりました。一通り学び卒業、やはり横浜が忘れられません。戻って来たこの北方町は初めての町です。六畳一間にミシン、裁台を置いての生活です。子供もこゝからの通学です。この頃は、地域により学力、環境、言葉の違いがありました。馴染むまで大変だったと思います。

近所の方も朝早くから夜遅く迄ミシンをふむ私の姿をみて一人、二人と掃除、洗濯と手伝いに来て呉れました。勿論、掃除機も洗濯機もない時代です。皆手作業で、何の見返りもない好意です。隣は何をする人ぞと云う今の時代では考えられません。思っておせば私一人で仕事をし、子供を一人前にしたのではありません。皆さんの御力添えがあつての事と深く感謝をしています。一人の息子でしたが今は孫、曾孫と増えました。表に出れば沢山のおしゃべりが出来るお友達に恵まれ楽しい日々を過ごしています。

今は幸せです。感謝しています。これからは家族に迷惑をなるべくかけない様残り少ない余生を楽しく送りたいと思います。